

「絆」の意味世界

「絆」の意味世界

柴門ふみに見る人間観・女性像

要旨

なぜか柴門ふみの作品に気が付いたのいつのころだか覚えていない。さほど可愛い女性を描いているわけでもなく、ごく一般的な何処にでもある女性が彼女の作品の中には描かれている。そして、内容が日常的でありながら、どこか非日常的な感じを醸し出している。彼女の作品がトレンドイーなモノであると言ったのはかなり後のことになってからだった。『東京ラブストーリー』がテレビでドラマ化されてからだった。しかもはじめ「柴門」という名前が読めなかった。だが、「女性論」を講義したりするうちに柴門ふみの作品に興味を持つようになり、マンガの話をするところから、改めて柴門ふみの作品を見直すことにした。改めて見直したことによって感じたことは、柴門ふみはすごい勉強家だと言うこと、そして時代を鋭く見ていることであつた。ごく、一般的なありふれた家庭を舞台にさせながら一皮むくと顕れてくる裏側の世界を鋭く追求しているのである。それも、年を追う事に、つまり作者自身が年齢を重ねるにつれ肉体的、感情的な面からより精神的な世界へ展開しているように見受けられる。柴門は単なる家族を意識していない。同じ家に住まなくても、心を通わせあえる絆の大事さを最近の作品の中で描いているのである。人間関係がい

ろいろと問題となるこの時代の中で、新しい(?)人間関係の模索がなされていると考えている。

春日井 真 英

★はじめに

流されない!

妥協しない!

自分らしく!

「女として生きる」柴門ふみのマンガには、こういう主張が秘められている。作品には戦後の時代を踏みこえてきた女の主張があり、女として生きるという目覚めがある。

☆

柴門ふみは「日本一絵がヘタであつた」マンガ家だと自称する。マンガ家デビューした時は、「日本一絵の下手なプロ」と言われたそう

☆はじめに

☆☆柴門ふみの精神的土台

☆☆マンガに見る女性の意識

☆☆☆まとめとして

である。^早このマンガ家(著者はこの表記を使いたい)は、あるときから目からウロコが落ちるようになるようになったと振り返っている。それは、頭の中にイメージした人体(原文では石を拾う人体ポーズ)を手で、そのイメージを紙の上に描写すると言うことに気がつくことであつた。この、彼女の気づきは話し言葉で文章を書く「言文一致」に通じるものである。頭の中にイメージした姿を紙の上に落とすだけで描かれていくようになるには、並々ならぬ努力があつたことをこのエピソードは物語っている。しかし、そのようなことは全くおくびにも出さずに、彼女はさらに次の言葉を繋げていくのである。

正確な記憶は確かなイメージ像を脳に結ぶことができる。確かにものを見ていれば、絵はグンとうまくなる。

絵を描く、と言うことは、ものをみるということなのだ。

手先の技術は、訓練でいくらでも上達する。だから、ものを見ることさえできれば、絵は誰だつてうまく描けるはずだ。

「ものを見ること」この指摘は、単純にして明快である。我々の多くは、この「見る」という行為をいかに疎かにしているかよく分かるし、授業の中でも学生の反応から「あ、こいつ何もモノを見ていないし考えてもないな」と品定めすることもできてしまう。そうなのだ、学生に課せられている仕事の一つは、考える事ばかりではなく、何でも見て、そこから何かに気がつくことでもあるのだ。そういうなかで一癖か、二癖持っている学生はやかいだが、なにも見ず、何も考えない事のない学生はもっと厄介である。きっと、お利口で、大人しい良い子供を演じて過ごしてきたんだろうなと嘆息するばかりである。

さて、この「見ること」の重要性に気がついたマンガ家、その人は柴門ふみ という。しかし、著者はこの人の描くマンガの世界には、

「絆」の意味世界

この時代の女性像(観)を大きく変えるものが秘められていると考える。

一言で言うならば、男が求める女性像と女が理想とする姿の乖離を描き出されていたのだ。オトコの言いなりになる女、言

い換えれば従順な、ある意味家庭的に見える女性がその心の中を吐露しはじめていたのだ。ただ強い女が主題となっているのではない。単に自立する女でもない……個人として女であることを意識した、いや、意識できた女を描こうとしているのだ。柴門ふみの作品に『小早川伸木の恋』。

その第二巻の第11章に不思議な名前前の付いた章がある。「足ルヲ知ル」である。

ここでは、自分の中に「足らない」ものを求める人間の姿が多々描かれている。

満たされることのないさまたまな欲望に駆り立てられている人物が取り上げら



『小早川伸木の恋』第2巻27頁



『小早川伸木の恋』第2巻56頁

「絆」の意味世界

れている。主人公の小早川の妻も「足ルヲ知ラナイ」女の一人として扱われている。そうして、この対極的存在として小早川が心を寄せるようになるのが盆栽教室の作田カナである。そこには、若さと、かわいさだけを売り物にするわがままな女（小早川の妻）とは違って、あるがままの世界をそのままに受け入れて行こうとする生き方が示されている。そこで柴門は、人を盆栽に喩えながら、その人の生き様を問うものであった。そのことは、この章の中に出てくる漢詩「千載の古根土一盆 無辺の春色窓前に満」で理解することが出来る。柴門ふみは小早川に「もし一盆にも満たない土に移植されたとしたら？」と問わせている。つまり、愛が少なくなったらどうなるのだろうか？と問わせているのである。これは、作中人物の置かれている状況を反映させてのことであるわけだが、この問いに対して次のように答えさせている。

「土の量は問題ではない」



『小早川伸木の恋』第2巻57頁

では、何が問題なのだろうか。それは、「欲を追いかけてもキリがない、それよりも小さな場所で満足して花を咲かせる人間になること」と応えている。置かれている状況、それがなんであれ、そこにどのようにすれば「幸せ」を感じることが出来るのか、と言う問いが読み手につけられているのである。

与えられている状況の中で「どう生きるか」を柴門ふみはいくつもの作品で問いかけている。『あすなる白書』Ⅰ、Ⅱは思春期（高校・予備校時代から）から今風に言う「アラサー（ほぼ三十代）」になっ

た女性の内面に同性の目線で踏み込んでいるのである。そこには、家庭があり、男女のめぐり逢いがあり、別離、種々の悩み、それらの苦しみの中からどのようにして「絆」を構築するかという試みが描かれている。制作年代的には、『東京ラブストーリー』の方が早い。そこでは大学を出て社会へ飛翔を始めたばかりの男女の姿の方が描かれている。時代的な特徴か？筆者は若い女性の自由奔放さに柴門の目線を感じてしまう。時代の産み出した女性の生き方を伺わせる。筆者がここで引用しているのはすべて単行本化されているものである。つまり、週刊誌に連載されて世間の目に触れているのは、単行本として出版されるよりも1〜2年は前と考えるべきである。そして社会はこのような連載物よりも早く動いていたことを意味する。そのことは、作者 柴門ふみがその微妙な時代のそよぎに気がついていたことを理解しなくてはならない。男と、女の様々な関わり、その時代の拘りが『東京ラブストーリー』では描かれている。自由奔放な女性力に振り回されながら、悩む若い男は女性が本来持っていたであろう性に気がつかなかったのであろう。やはり、男性の方が女々しく、そして奥手である。これは上村一夫が『紅い部屋』で描いている。時代は「1980〜1985年」短編集の中から1980年辺りとなる。

同じ言葉でも上村の理解と表現の仕方とは違う。上村は「女々しい」男を自分に重ね合わせるように第三者的に表現しているのに対して、柴門は決断できない男性の姿を『Age35』や、『非婚家族』で描こうとしている。



（小早川伸木第2巻40頁）



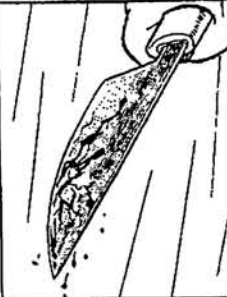
(上村一夫『紅い部屋』18頁)

この傾向は『東京ラブストーリー』の中の主人公、完治の女性への想い方に、見る事ができる。だが、一方で上村は女々しい男の存在と同時に女の意志の強さを知っている。それは、決断し実行し自分の身の振り方を示すところに暗示されてくる。ここでは女々しい存在としての女性ではなく「振られたぐらいで死ぬのがみっともない」と、言える女の生き様を指摘しておきたい。



(上村一夫『紅い部屋』173頁)

男に振られたぐらいで死ぬのが、みっともなく思えてきてね。



(上村一夫『紅い部屋』173頁)

柴門の作品の中で男と女の様々な関わり方が男の視線と女の視線で、絡み合いながら交錯していくのである。もちろん柴門ふみには多くの作品があるが、彼女の捉えようとした女性像を考えるためにいくつかの作品に限定して、述べていくことにする。しかし、大まかに筆者の柴門の作品に対する考えを示しておきたい。柴門ふみの、1990年代の作品『東京ラブストーリー』では人間関係の描写には作中人物の内面性は薄く感じる。この内面の描き方がしつかりしてくるのはたぶん本人が35歳を経過してからかと思慮される。『家族の食卓』(1991)、『PAGE 35』(1995)そして『小早川伸木の恋』(2005)などでは、作者の人生経験の幅が広がったのか両性の内面へ

の踏み込みは格段と変化しているようである。今回それほど触れることが出来なかったが、柴門の『家族の食卓』[AGE 35]そして『小早川伸木の恋』には、これまで見ることがなかった女性ならではの視点がある。それはかなり古い神話の視点であるが男性を女性が支える『おなり神』^(母)的な視野を見ることが出来るのである。これについては稿を改めたい。

★ ★

柴門ふみの目線をこのような男と女の領域に向けさせたのは時代だったかもしれない。頭でっかちの女子大生だったという彼女を取り巻いていたのはボーボワール、サルトルの実存主義が騒がれていた時代であつた。また、「翔んでる女」と言うキャッチフレーズのはやつた時代でもあつた。彼女たちの目標はボーヴォワールの生き方であつたという。そして、彼女は同棲をはじめたクラスメートの姿からボーボワールの「女は作られる」「環境が女を作る」という言葉に少し首をかしげながらも惹かれていくのである。彼女自身も触れているようにボーヴォワールに憧れたことと作品の主題は無関係ではないであろう。少し、脇道にそれるかも知れないが、柴門ふみを巻き込んだ『第二の性』を少し考えながら作られる女性について考察していきたい。

この『第二の性』を考えれば、ボーボワールの思想が少し見えてくる。彼女の言う、思想というものがその時代精神を背景にすること、を忘れないならば、マンガの中で扱われている世界は、まさにその時代の精神であつたことを指摘できるからである。もちろん、そこには第一次大戦後の女性の社会参画という事情があり、女性の発言力が増強となつていたと言うことは無関係ではない。この著作の中でボーボワールは、当時のヨーロッパの男性達が抱く女性への視点について

「絆」の意味世界

て『ユリエルの報告』を引用しながら、次のように述べている。ジュリアン・ベルダンによるこの作品は人間の生を調べるように命じられた天使ユリエルの報告というかたちで書かれている。

「オトコの身体は女の身体をぬきにしても、それ自体で意味を持つ一方、女の身体は男のことを考え合わせなければ意味を持たないように見える……男は女に関係なく自分について考えられるが、女は男なしには考えられない」。つまり、女とは男がこうと決めるものでしかない。

さらに、女は男を基準にして規定され、区別されるが、女は男の基準にはならない。

ボーヴォワールは、天使ユリエルの記述を歴史的、思想的な視点から批判しているのである。そこには女性性という存在があったとして、漸く存在意義を見いだせるのだということに批判しているのである。これを女性の自立と見るのか、それとも思想的批判と見るか見解が分かれるところであろう。そして、ここにはキリスト教的な女性観が隠れていることは明白である。さらに

女は常に存在したのだ。女はその生理的な構造によって女である。そして、歴史がさかのぼれる限り昔も、女はつねに男に従属していた。この従属は事件、あるいは生成の結果ではない。それは起こったことではないのだ。女の他者性が絶対的なものに見えるのは、一つには、それが歴史的事実の持つ偶然的性格をまねがれているからである。時代の経過の中で作られた状況は、時代が変われば解体されることもある。

と、指摘し、その理由を「女自身がこの反転を行わないからである」という。その理由として、女たちが、他と対立することで自らを位置づけるような、一つの統一体（ユニテ）として団結する具体的な手段を持っていないからだとし、さらに女は男たちのあいだに分散して生

活し、他の女たちとのつながりより、住居や仕事、経済的利益、社会的地位などによる、特定の男性——父や夫——とのつながりの方が密接である指摘する。

日本での女性の権利・意識の問題をここで論じる予定はないが「不安の時代」として始った第一次大戦後のヨーロッパでは、既成の概念に対する見直しがおこり、キリスト教的世界観への批判が生じたときでもあった。これに匹敵するような社会的事象を日本に探すとすれば、大正デモクラシーから第二次大戦終了期に相当する期間であると見ていくことが可能である。大政奉還から明治政府への移行よりも第一次大戦によって引き起こされた政治的、思想的な激動の方が日本のさまざまな領域に影響を及ぼしたと考えられる。とくにこの第一次大戦を契機に戦争の方法までも大きく代わったといわれる。それまでの騎兵と歩兵という人間同士の戦い方から、さらに大きな力と力のぶつかりあいと言うこれまでの概念を越えた戦いへと発展してきたのである。大量の砲弾、機械化された戦車や、航空機、さらには毒ガスまでも使用されるようになり、人間は戦場では単なる一つの駒となり、人間の尊厳すら失われていった、と言われる。このような惨状を目の当たりにしたことから、人間そのものが哲学的考察の対象になり、既成の概念の見直し、否定、つまるところ神の死、といった視点からの考察、芸術への動きが生まれてきた時代でもあった。いかなければ絶対的な存在の否定である。このような時代の中で、生まれてきた一人がボーヴォワールであった。もちろん彼女一人ではなにもできなかったであろう。彼女の思想家への産婆役だったのがサルトル（J.P.サルトル）だったことは自明である。これまでは単なる「男」「女」の関係がじつは根深く、大きな問題であったことが『第二の性』から明らかとなる。だが、ボーヴォワールがこの作品を生み出すきっかけが第一次大戦（一九一四—一九一八）であったとしても、一九四九年までに約三〇年

という長い時間を要していた。この、女性の権利、意識というものがアメリカ、イギリスで生まれていかなかった背景に、同じ戦勝国としてのフランスの体験した悲惨さ、人間の苦悩というものが秘められていたからである。アメリカは、ヨーロッパとは異なり、進歩主義の道を歩み始めていった。生まれてきた思想が定着し、発展していくか否かは、それを受け止め、発展させていく精神的土壌があったかという問題となっていく。つまり『第二の性』が生まれてくる背景にサルトル(J.P.Sartre)の存在があり、時代の精神が、そのことの意味を理解していたと言うことである。サルトルの説く、アンガージュマンという思想は、政治的な意識が強いが彼女はその作品の中で、自己と他者の関わり合い、男と女という問題に視野を求めたと考える。この視野の背景には男と女の関わり、つまり他者の実存と共に生きるための自己拘束の再認識であったのかも知れない。このことは、表現を変えれば男と女の関係性の中にすでに存在していたにもかかわらず中世以来の宗教的意識の中で封じ込められてきたものと見ることを可能とする。それが女性らしさというものが社会的に作られた約束事に過ぎないと言う主張に繋がり、それまでの女性は、その社会的関係性のなかでしか認識されていなかったというのである。つまりボーヴォワールによって女性は、他者によって正当化されていたことを否定し自らを根源的に問い直したのである。つまり、さまざまな思索は生まれるべくして生まれ、そこには必然性が常にある。リルケの「石に耳を傾ける人」では、耳をそばだて大理石の中の声を聞き、その声を辿って石の中から神の姿を掘り出すミケランジェロと言う名の匠が述べられている。その作品の中の神は自らにはなにもできず、ただ大理石の中から神という自分を掘り出すミケランジェロの手に望みをかけているのである。リルケが、この作品を書いたのは一八九九年であるという。

この時期はヨーロッパ全体が精神的に不安定な時期であったと言える。フランス革命から始まったフランスの一九世紀は、ヨーロッパにさま

「絆」の意味世界

ざまな思想・哲学を産み出させる基となった。これは、日本でも同じであった。政治的には大政奉還によって、幕府から天皇側に政治権力が移ったことは、価値の変動に繋がり、ものの見方考え方への作用は今の時代の比ではなかったと言うべきである。時代の変動の中で人々の心の中に生じたものは大きな価値観の変化であった。古い価値体系から、これまでは異なる異質の価値体系へと強制的に追いやられた日本はアジアの中の小さな国からの脱却を求める術を探らなくてはならなかった。そこには、世界の動きに参加するという選択肢しかなかったのかも知れない。

明治期の日本が取った行動は、サルトルの考えたアンガージュに匹敵するかどうかはわからない。しかし、自分(日本)という不安を抱いた者が、その存在の拠り所を求めて、関わるという形で行動したものと考えていける。個人という存在に内包されている「不安」が意識させられたのが世界ではフランス革命からであり、第一次大戦を契機として燃え上がった。日本では大政奉還から日清・日露の戦争を経て精神的な目覚めがもたらされてきたのであり、それが大正デモクラシーから第二次大戦と言う長い道のりを踏んで平塚雷鳥をはじめとする多くの女性活動家達が出ていたことを問題としなくてはならない。彼女たちの行動には当時としてさまざまな批判、報道があったことはよく知られている。そういう意味で現代とはほとんど変わらないのあろう。

柔肌の熱き血潮に触れもみで寂しからずや道を説く君

と与謝野晶子が謡ったが、これは明治三十四年(一九〇一年)八月十五日に出版された『乱れ髪』に収録されている。この短歌の解釈、社会的背景については多くの意見があるが、ここではフランスに負けないう早さで女性の意識が高まっていたことの証としておきたい。そして、上村一夫の作品はこの絶望的な時代のなかで「絆」を求めて生きたさまざまな女達を、男の目線で、時には冷徹にをもって描いている。

★★★マンガに見る「女性」の意識

「雇用の分野における男女の均等な機会及び待遇の確保等に関する法律」(昭和四十七年七月一日法律第百十三号)が、成立したのは一九七二年である。それは、日本の景気が安定してきたころでもあった。この頃は、列島改造という言葉と共に経済が大きく動いていたころでもあり、老人問題が取り上げられ始めたころでもあった。また、マンガの領域では上村一夫の『同棲時代』が話題となっていた。この作品は「同棲」というかたちで、愛を育もうとしながら、互いに傷つく、男女二人を描いたものだが、すでに先駆的な意識としては平塚雷鳥が求めた「共存の愛」があった。ここには、スウェーデンの女性解放論者エレン・ケイの思想の反映もあったと言われている。柴門ふみはさまざまな形の男女を描きながら「共存する愛」を『新・同棲時代』で描いている。この作品には、上村一夫の作品の影を見とることも出来る。しかし、作中の女性に対する視線は違っている。

経済の安定は、社会の安定をもたらす。そして、経済的ゆとりは我々に歴史を振り返らせさせる。作家の視線はその人が置かれた状況を微妙に反映させていると言っている。上村一夫は地方から出てきて都市で呻吟する女性達に眼を向けている。『しの川』をはじめ、阿部定を扱った『陰花伝』など、全体に社会に翻弄されていく陰にすむ女性を主題に選びながら、男の視線で見ている。それに対して、柴門はあたかも自分の人生に作品を重ねるかのように、これから先を生きる女性像を描こうとしているのである。筆者が柴門ふみを評価したいのは、彼女が単にさまざまな女性像を捉え描き出そうとしているからではない。そこに、現代を生きる男と女の日常的なさまざまな関わり合いが取り上げられているからである。時にはオムニバス形式を取りながらも、この時代を短編に凝縮させている。柴門が扱う作品は、何処

にでも起こりそうなことであり、一寸したボタンの掛け違いから生じることばかりであると言える。一見平和そうに見える家庭、たとえば『家族の食卓』1991年(1988年全三巻、『Age 35』(小学館Big Comics Special 1995年2月)1995年(月)。そのような家庭の裏側には本人達の意志とは別のベクトルが働き、自分たちが築こうとするのとは違う世界に巻き込まれていくのである。『東京ラブストーリー』(小学館Big Comic Spirits1990(1991全四巻))、『あすなる白書』(小学館I全三巻1993年6月)1992年、II部全二巻1993年8月)1994年)そこには求め合う関係としての男女の姿がある。柴門の視点は『あすなる白書』以後、よりよい人間関係を探る(?)と言った方向へ視点が微妙に変わってきている。求め合う関係から、互いの人生を見据えようとする関係に焦点が作品と共に移ってきている。それは、家族を見直すという考え方である。血を分けた物だけではなく、かつて同じ時間を共有した者同士という関係をも彼女は「家族」という風に捉え始めているように考えられる。それは、『非婚家族』の中で



『非婚家族』4巻266頁)



『Age 35』(下) 244頁)

会わなくても

そばにいらなくても、

思い出すだけで、

心の中に灯がともったような

温かな懐かしい気持ちに

なれたわ。

——それはもう

“愛する家族”なの……

と、言わせている。引用した場面は元妻達（二人）が、元夫が三番目の妻と結婚式をあげる場面での独白である。そして、三人の妻達の温かい関わり合い方が互いの家族の解放という形で暗示されていく。この温かい関わり合いこそを柴門が求める互いに温かくなる人間関係であると言うことが出来る。『あすなる白書』（1992年～1994年）からこの『非婚家族』（2000年～2002年）までの約八年と言う期間は絆という意識でできた柴門の成長期であったのであろう。

柴門自身『あすなる白書』の後書きで面白いことを書き残している。

・・・なぜ『あすなる』を書いたのですか、と何度か聞かれました。描いたのではなく、描かされたのです。・・・（中略）・・・入院中の息子を見舞う途中の西武線の中で、テスト帰りの娘を待ち続けた塾の玄関の暗闇の中で、私の目は、あすなる達のドラマを追っていました。

もはや私の力では止められない勢いで、勝手にドラマが繰り広げられてゆき、私はただそれを必死で紙に描き止めていたのです。だから、『あすなる白書』は、何者かによって描かされた作品なのです。

「絆」の意味世界

多分、私の漫画家人生において、どうしても描いておかなければならなかった作品なのです。死ぬまでにどうしても残しておきたかった作品なのだ、と自分では思っています。

（『あすなる白書』第I部 作者後書き）

そして、マーケティングリサーチの対象から外れて不評を買ったが、この作品を描くことによって自分自身は大変な満足感を味わったと振り返っている。

この作品は、成長？していく女性を扱っている。年代的に多感な高校生から恋を知り、性を体験し、自分の心の中の声に応えるために何をしなくてはならないかという成長の過程が描かれている。主人公の二人を取り巻く環境は大学進学、各自のさまざまな事情の中で一つの



（『あすなる白書II』第3巻181頁）



(あすなる白書Ⅱ部第3巻253頁)

子供との成長に自分の反社会性障害の治癒を託そうとする。作中人物の掛井の精神的な悩みの原因が自分の幼児期の成長過程にあると気が付いたからこそ決断であろうが、ここには、柴門の温かい人間関係への模索がうかがわれる。幼少期が、一人の人間の成長過程にまでも及ぶという指摘である。自立し、人間的に成長するためには幼少期の問題があるというわけだが、ここには現代社会の根底を見る柴門の目線がある。

ここに来て、掛井は漸く自分の内面の問題に直面したと言える。『あすなる白書』第一部「旅立つ前に」

区切りを付けている。理想と現実、その中ではさまざまな人生の分かれ道が延びていくのである。それは、自分たちの選択した道、選択せざるを得なかった道でもある。そして、第二部では、大学生活4年間を経て、再会し、惹かれながらも過去のこだわりから抜け出せない人間関係が描かれる。それは、各自の生い立ちにも結びつき、星香と松岡の間に生まれた子供を自分で育てるとして松岡家に嘘をついてまでして、引き取ってしまう。

掛井としては、母子家庭で過ごした自分を、「反復療法」したいと星香の七歳の子供との成長に自分の反社会性障害の治



(あすなる白書第Ⅱ部二〇二頁)

(32話) で教会の子として過ごしたと言う伏線が、ここでその問題点が明らかに becoming するのである。教会という育った環境の中で、掛井が大事に思ったことは、「人間らしい感情」の大切さであったといえる。それは、「家族」という存在であると柴門が告げているのと同じである。そして、かつて掛井を想い、今は掛井への想いと会社社長との不倫の泥沼にいる園田なるみは取手の結婚相手が口にした何気ない言葉「(出会ってやっぱり好きになってしまったら)奥さんから奪ってでも、結婚したと思う。」から自分の内なる気持ちに気がつくのである。まだなるみの気持ちは自分に素直でなかったことを意味しよう。そのことは、不倫の相手の奥さんに対しては「奪ってしまいたい」とまで思えなかったところに帰結する。



(あすなる白書第Ⅱ部第3巻255頁)



あすなる白書第Ⅱ部第3巻256頁

そして、かつての掛井に対する想いを振り返り、自分の選ぶべき道筋をしっかりと確認するのであった。そして柴門は「あたしは…あたしを一人の人間として…丸ごと認めて愛してくれる人と結婚したいのです。」「一対一で向かい合って生きるパートナーが欲しいんです。」と、園田なるみに言わせている。

はじめの方でボーヴォワールやサルトルを引用し、アンガージュに関わり合いのことを論じた。サルトルは政治的側面に眼を向けていたが女と男の関係にもアンガージュと言うことは大きな問題となってくる。端的に言って子育ての場合でも同じであろう。ただし、なるみの

不倫相手の秋庭の妻が言っているように「相手を間違えない限り」であることは明白である。この関わり合いの中で、幸せが生まれてくるのである。

マンガの中のさりげない言葉のやりとりの中に、柴門は巧みに男女の世界を浮かび上がらせている。

また、柴門は『あすなる白書』第Ⅱ部の終わりの方で、さりげなく丸一日以上を寝てしまった園田なるみの新しい人生を、「眠り」、「雪」という象徴をもちいながら、園田なるみの心を紡ぎ出している。そのことは、さらに生まれてくる子供の名前「あすなる」に示されい

ると言って良

い。

反社会性パ

ソナリティ障

害を持ってい

ると自白させ

ているかのよ

うな掛井の告

白、掛井の下

でなるみが落

ちていく眠り、

ここには巧み

な象徴的世界

が隠されてい

る。単なる場

面転換、物語

の展開の鍵で

はなく、この

場面での「眠



多分、もう生涯
二度と味わうこと
できない
本当の気持ちだったなって
やっとわかったの。



二十歳の頃の
恋は――



あの頃の気持ちは、
本物だったな――って。



確かに
本物だった

(柴門ふみ あすなる白書第Ⅱ部259頁)



一対一で
向かい合って生きる
パートナーが欲しいんです。



あたしは…あたしを
一人の人間として……
丸ごと認めて
愛してくれる人と
結婚したいんです。

(あすなる白書第Ⅱ部第3巻274頁)



愛は素晴らしいわ。
相手さえ
間違えなければ、
――って。



「男の愛なんて幻想だ」
――って、園田さんに
以前言っただけど、

(あすなる白書第Ⅱ部第3巻263頁)

「絆」の意味世界

り」には非常に多くの心理学的な暗示が隠されていることに注目しておくべきであろう。愛する人の前での眠りは、擬似的「死」であり、ほぼ一日を経ての覚醒は新しい誕生（再生）に他ならない。しかも外は雪という状況は真っ白な地図の中への旅立ちなのである。

☆☆☆☆ まとめとして

この反社会性バースナリティー障害持つ掛井と対比的に描かれているのが秋庭宗輔（不倫の相手）であろう。しかし、彼もまた掛井と同じような生い立ちを有していることは注意すべきである。二人とも、片親であったこと（愛人の子）、それ故であろうか二人は過度な形での社交性と反社交性という形で描かれている。そして、秋庭には彼の娘が彼の成長の教育係と形で暗示されている。

女性の地位、女と男の幸せの背景には社会的、経済的な問題も否定できない。とくに経済の安定は女性の自立性を高め、男に隷属する存在から男と共に社会に参加するというスタンスを持つことを意味する。だが、そこにはまだ越えなくてはならない昔ながらの意識が存在していた。意識を変えるためには多くの問題があった、多くの矛盾があった。社会の変革、これは難問である。この難問をさりげなく指摘しながら越えていけるのがマンガという手法であろう。かつて、この意識に挑んでいたのは大正から昭和にかけては短歌であり、文学であった。そして今この意識改革に挑戦しようとしているのがマンガと言う表現手段であると筆者は考えている。文字として表現する代りに、絵画的に表象として移りゆく人間模様や社会現象に焦点が多々当てられてきたのである。

また、これらの作品は平行して「私」に焦点を当て、「私」と他者の関わりを考える傾向も作品と見ることができるようになった。ここでは、マンガの領域から考える事にするが、ボーヴォワールが指摘した「他者」と見なされていた女性が、「私」として「他者」である「男」との関わり方に挑んだ姿が『東京ラブストーリー』、『あすなろ白書』第一部、第二部、そして『新・同棲時代』から『非婚家族』に結実した結果と捉えたい。つまり、柴門ふみはこの時代の問題として他者との関わり合いの中で生じる問題にも焦点を当てている。それらは、「今、現にここに存在している女が」が関わりうとする「第一の性Ⅱ男」との問題である。ボーヴォワールの『第二の性』から、約三〇年を経て問い直されているのが二十一世紀を生きる女性の姿勢が、マンガの中に示されて来ている。

----- 註 -----

- 註1 柴門ふみ 『サイモンの秘訣』講談社文庫66頁 1994
- 註2 前掲書66頁
- 註3 柴門ふみ 『小早川伸木の恋』②27頁
- 註4 『小早川伸木の恋』全5巻20005年〜20006年 小学館
- 註4 『あすなろ白書』1992年6月〜1992年11月 全三巻、小学館
- 『あすなろ白書Ⅱ』1993年8月〜1994年4月 全三巻 小学館
- 註5 『東京ラブストーリー』1990年〜1991年 全4巻 小学館
- 註6 上村一夫 『紅い部屋』1980-1985上村一夫晩年傑作短編集 小池書院2009年

註7 『Age35』 1995年2月から7月にかけて単行本化されている。

それに対して『非婚家族』(小学館 BIG COMICS2000〜2002年)

註8 上村一夫『紅い部屋』173頁

註9 家族関係を示す言葉。奄美・沖縄では一般に兄弟をイヘリ、姉妹をウナリ・オナリとよぶ。これは兄弟姉妹を一括してキョウダイとよぶ本土の用語法とは異なる日本語である。オナリ神信仰とはオナリがイヘリを霊的に守護するとする信仰であって、イヘリは旅に出るときにはオナリ神のシンボルである白い布などを身につけていく。こうしたオナリ神信仰にみられる兄弟姉妹間の連帯は夫婦関係とは対立する。柴門の『小早川伸木の恋』『非婚家族』を検討するとこれによく似た構造を見ることが出来る。作中人物の男性が元夫婦であった女性、もしくは何らかの関わりを有していた人物(『小早川伸木の恋』の場合は、元婦長の添田、そして患者であった大熊よね)がおなり神的な機能を果たしていると思われるのである。

註10 『フーミンのお母さんを楽しむ本』柴門ふみ PHP 文庫156頁1993 (1991) PHP研究所

註11『決定版 第二の性 I』(シモーヌ・ド・ボーヴォアール井上・

木村監訳 新潮社1998(1997)

註12 前掲書 11頁

註13 前掲書 11頁

註14 前掲書 14頁

註15 前掲書 14頁

註16 サルトル(J. P. サルトル)Jean-Paul Charles Aymard Sartre, 1905年6月21日 - 1980年4月15日)はフランスの哲学者、小説家、劇作家、評論家。シモーヌ・ド・ボーヴォワールは彼の内縁。サルトルはアンガジェ／アンガージュマン(政治参加もしくは社会参加)を主張し、自らの政治的な立場を主張する。筆者はこのアンガージュという考え方を政治的関わりだけではなく、社会的関わりにも適

「絆」の意味世界

応されると考える。それが、ボーヴォワールの『第二の性』の意識の中に顕れていると考えている。

註17 『リルケ全集』第四巻「神様のお話」その第八話 富士川英郎

訳者代表 弥生書房 昭和四十八年 426頁

註18 前掲書第七巻 昭和五五年(昭和四九年) 442頁 リルケ年譜より

註19彼の作品の『信濃川』『菊坂ホテル』『陰花伝』などをはじめ多くの作品の主題は、不安な時代を生き抜こうとする名も知れない人を追いかけている。また、名の知れた男の陰に生きた女性達への視線がある。

註20『日本列島改造論』田中角栄「日刊工業新聞社」

註21『恍惚の人』有吉佐和子(新潮社)

註22『同棲時代』上村一夫「週刊漫画アクション」に連載されはじめ話題となった。

註23『新・同棲時代』I・II 1994 (1990) 1991 小学館。この作品には Peter Pans & Wendies と、いう英文の副題が付いていることに注意したい。しかも複数形であることは世の中に多くの大人になりきれない男女が存在することを見越してのことだったのだろうか。

(本学人文学部教授)